

「実存の痛み」に寄り添うために

「迷惑をかけない生き方」ではなく

修士1年 月崎時央 ライター

◆生きがいを失って進行した認知症

子どもの頃から大好きだった私の叔父（76）は5年前に認知症になりました。叔父は母の年の離れた弟なので、10代後半の私にとって少し年上の兄貴のような存在でした。釣り、海水浴 スキー ギターの弾き方、いろんな事を叔父から教えてもらい今振り返ると宝物のような時間を叔父からもらいました。

叔父は高級ハンドバッグを作る腕の良い革職人でしたが、時代の変化とともに仕事が減り、小さな工房が廃業に追い込まれた頃から、少しずつ認知症の兆候が現れていたようです。仕事を少しずつ失う時のストレスはかなり大きなものだったのではないかと想像します。

木曜日に西田先生のお話をお聞きして一番印象に残ったのは「実存の痛み」というキーワードでした。そしてこの週末、私は久しぶりに叔父夫婦に会いに行ってみることにしました。

叔父は現在も私のことは認識でき普通に世間話もしますが、残念ながら昔一緒にすごした頃の記憶は叔父の中から完全に消えているようです。

そして叔父の奥さんやその家族もここ数年、混乱する状態の中で頑張って叔父のケアをしている様子がよくわかりました。

でも話を聞くほどに、その思いの根底にあるのは「もっと早く発見して薬を飲ませればよかった」「徘徊をしてしまわないためにどうやって家に鍵をかけようか」「物をなくしてしまわないよう代わりに管理しよう」と、そのほとんどは「叔父を安全に保護しなければならない」という発想からスタートしています。

これはもちろん現実に直面した家族なら当然の態度だと思います。そして関係者の誰もが善意で一生懸命ですが、やはり叔父が本当は抱えているであろう

「実存の痛み」に思いを馳せている人はいない気がします。

確かに叔父は何を話してもすぐ忘れてしまうし、何かを尋ねてもはっきりした返事が返ってこないので一見「何も気にしない人 無頓着な人になってしまった」と判断されがちです。

しかし先生の講義を受けた私は「叔父は認知症になったことで深い悲しみや痛みを経験しているのだ」という視点で叔父のことを見てみようと思いました。

まだよくわかりませんが、今後その視点に立つと叔父が時々行う不可解な出来事の意味をもう少し深く考えるヒントが見つかりそうな気がしています。

西田先生の講義にもありましたが、叔父の奥さんも私たち親戚も、やはり「人に迷惑をかけること」を恥と感じています。そして常に「迷惑をかけない生き方」ばかりに意識が向いしまうのです。その結果、おそらく叔父が感じているだろう「実存的な痛み」について考えることを無意識に、後回しに、あるいは無視してしまっている気がします。

もちろん目の前のことに手一杯の叔父の家族を責めることはできないので、せめてもう少し距離の取れる場所にいる姪の私がそれを意識することが大事かもしれないと思いました。

私は介護の辛さを訴える叔母に、先生の講義でお聞きした「認知症は世界中で人類が直面している課題なんだよ。その人をどう支えるか？世界の仲間たちがどういう社会を作ろうとしているのかみんな考えているんだって。世界中にこれが完璧という理想郷はないけど、まだまだ研究は進むよ。だから叔父さんも叔母さんも一人じゃないよ。おばさんが笑顔で楽しくしていることはきっと薬より病気の進行を遅らせる力になるよ」と伝えてきました。叔母はちょっとほっとしたような笑顔を見せてくれました。

私は時間を見つけて叔父の得意な手作業で何かやりがいとなることを一緒に探し出せないか考えてみようと思います。

本日はありがとうございました。